

平成三一年「花のまわりみち入選句集」

俳句入選句

木村 里風子 選

特選

(三句)

「二席」

花の径地金を溶かす光洩れ

若宮 直美

(評) 地金を溶かす、そこから新しい貨幣が生まれる。恐らく令和の文字の貨幣であり、新しい夜明け。

「三席」

落花踏む少し踏絵を踏むような

藤本 卓昭 (卓水)

(評) 踏絵を踏むように歩く。発想が意外性。花に対するあわれみ、また、いつくしみがある。

「三席」

車椅子の目の高さまで八重桜

山口 宏子 (ひろ女)

(評) 車椅子で花を見る作品は多い。この句は八重桜の本意をよく捉えている。花の重さは言っていないが、目の高さにある。

入選

(四句)

桜舞う見上げる父の車椅子

油目忠之

(評) 車椅子の句は他にもあった。この句は父が乗った車椅子という具象が効いているのである。押す人は誰か、言っていないのがよい。

花片を避けて歩むやまわりみち

福永 將來 (完爾)

(評) 落花を避けて歩く。美しさの故である。また、作者の優しさでもある。

雨上がりよどみにひとつ花筏

木村 昌子

(評) 雨後の水溜りに浮く花弁を花筏と見た、詩のある目である。

今年また花の盛りに来たりけり

石橋 康徳

(評) 昨年も来たときに花の盛りであった。今年も花の盛りに来た。運のよい花との出会い。

佳作

(十七句)

花ひらり窓の隙間の贈りもの	多尾 綾音(豆桜)
花屑の舞ひおちる時光り合ひ	野津 訓子(訓子)
傾げたる傘の中にも花の枝	高橋 幸子
亡き母の思ひ出映る紅手毬	伊達 智美
見上げれば桜の中をひこうき雲	中野 敏
花影や幽かに父の声したり	高井 瑞江
初桜去年もここを通りたる	藤原 真理
満開の桜未来の夢を詠む	松井 哲夫
三日月の空まだ青し花白し	村越 縁
閉門の音響きたり花月夜	山崎 和子
まわりみち枝垂桜の下くぐる	吉岡 昌文(雅文)
車椅子押されて見上ぐ八重桜	坂井 敏子
桜の下はにかむ孫のランドセル	楠田 平美
色の名も時の移りも花にみる	柴田 尚子
愛犬の想ひ出語る桜道	池本 久美
さくらさくらさくらの中を歩きけり	藤本 千エミ
散り様も花に個性やまわりみち	浜田 邦雄

選者吟

鑄造の音なく桜散りにけり

木村 里風子